

# 仏教企画通信

発行日 | 令和4年3月1日

## 67号

発行所 | 有限会社 仏教企画  
〒252-0116  
神奈川県相模原市緑区城山4-2-5  
Tel. 042-703-8641  
Fax. 042-782-5117

発行人 | 有限会社 仏教企画代表 藤木隆宣  
Email | fujiki@water.ocn.ne.jp

### はじめに

真宗本願寺派の布教使養成課程の開講式に臨席した大谷光真門主が述べた挨拶の内容紹介から始めよう。

布教使養成課程は全寮制であり百日間にわたって布教の基礎と実践を学ぶもので、開講式は阿弥陀堂において四月十日午前十時から行われた。受講資格は教師資格をもつ四十五歳未満の僧侶で入所試験の合格者であるという。本年の第一期生は四十三名。

大谷門主の挨拶は次のような内容であった。「宗門にとって布教・伝道は根本の大事な課題である。法義を自らどう受け取るか。(法義の)理解・解釈が十分納得できているか。広く世の中の課題、近くは法座に参拝する人たちの関心はどこにあるか。

これら諸課題を十分に踏まえ、ただ学んだ知識だけを伝えようとすると上滑りしてしまう。浄土に生まれるとか、仏の悟りを開くということに関心のない人に、自力は駄目で他

力の信心を頂かねばならないといくら力説しても伝わらない。『正しいけれども意味がない』というのは伝統仏教にたいする痛烈な批判である。正しいことであっても、相手

## 宗教における脱民俗化と再民俗化のあいだ

駒澤大学名誉教授 佐々木宏幹

『仏教企画通信』第28号(2012年・平成24年)より

の関心に即した形で伝えようとしなければ伝わらない。『中外日報』二〇一・四・一二、傍点筆者。

西本願寺住職である大谷門主は温厚な人柄と学究的な性格を具えた方で、その言動は仏教教団のリーダーたちの中でもとりわけ注目されている。

また門主は真宗教団を含む既成仏教教団の今後の行方を大変危惧されており、そのことを折々の発言や文章で表現していることもよく知られている。

さて、『正しいことであっても、相手の関心に即した形

で伝えようとしなければ伝わらない』という言葉は、宗教教団に属する人にとっては別に事新しい意味をもつ表現ではあるまい。ことに教化の現場に生きる者にとっては何を今更との感を抱くであろううな、いわば常識的な言説であるとも言えよう。

はたしてそう言うて済ましてよいものだろうか。決して軽い言説ではないと私は思う。ここには(1)正しいこと(2)一宗の教義(法義)(3)相手の関心(2)門徒・信徒、一般社会のニーズ、(3)相手の関心(ニーズ)に即して教義を伝える、の三

つの意味が表現されている。宗教者がこれら(1)、(2)、(3)の関連性について考えていくと、本稿の表題である「宗教における脱民俗化と再民俗化のあいだ」という問題に突きあたると、いや嫌でも突きあたらざるをえない。どうしてそう言えるのか。

### 脱民俗化と再民俗化ということ

「民俗」という言葉は広く用いられているようで実は民衆のあいだにそれ程深く浸透しているとは思われない言葉である。「民俗」の語を口にしたり文字にしたりしている人でも、その意味を訊くと明確に答えられないことがよくある。場合によっては「民俗」と「民族」を取り違えて受け取ることさえある。

私も講演などで話す際、「このミンゾクのゾクは俗人のゾクです」と断わることが少なくない。「民俗」はきわめて幅広い、従って曖昧な概念なのである。民俗学者は、「民俗」の語は民衆の習わしとか民間の風俗・習慣などという意味で用いられて、これに類する術語として漢語では土俗・習俗・風俗・慣習・習慣が、和語としては風習・慣行・慣例などがあるとする。さらに民俗は民間信仰や俗信としての性格をもつ場合が多いと記す(『日本民俗大辞典』吉川弘文館、二〇〇〇)。「民俗」の語は古代に輸入されたが、普及をみたのは新しく、学界でも一九四九年(昭和二十四)にそれまでの民間伝承の会を改組・改称して日本民俗学会が成立して以降のことであるとされる(前掲辞典)。巷間、「民俗」の意味が曖昧なゆえんである。

の宮城県は気仙沼市(当時は新月村)の一寺での出来事である。

(1)「鳥鳴き」。山門の横に生えている松の太木の枝に鳥が止まって悲しい声で啼くと、どこかで人が死ぬとされた。たしかに鳥が啼いた日には寺に死者の知らせが来たことを覚えている。この俗信は広く知られている。

(2)「幽霊」。不幸な死(事故死)を遂げた人は幽霊になつて出るといふ俗信があり、実際に見たとか遭ったとかいふ人はかなりいた。寺にやってきて住職に身振り手振りで事実を話すのを聴き、怖い思いをしたものである。死霊、靈魂の観念・感覚は今日も生き続けている。

(3)「口寄せ」。おかみさんと呼ばれる多くは盲目の女性巫者(霊媒)に依頼して死者を呼び出して貰い、巫者を通じて死者と生者が対話する死者儀礼で、私も何度か目にして

いる。以上の三例はすべて死者、死霊に関わる民俗、つまり民間信仰または民俗信仰の枠に入る事例である。

これらの民俗は今日消滅または弱体化しつつも、いろいろな形でなおわが国の「葬式仏教」を下支えしていると私は考えている。

さて、これらの民俗は仏教の教義(法義)とどう関係づけられるのであろうか。

はしよって言えば、仏教エリートと一般の仏教徒とのあいだ(…)には少なからず相剋・対立が見られるはずであ

る。なぜなら例外は除いて仏教エリートの多くは「脱民俗」あるいは「反民俗」であろうからだ。

釈尊はもとより伝統教団の開祖・派祖のほとんどが「脱民俗」つまり世間(社会)一般の日常的な生き方を批判し否定する教えを説き、実践したからである。

「聖/俗」、「出世間/世間」、「超俗/世俗」、「出家/在家」などの用語に示される二項対立的な図式を挙げれば十分であろう。

ところがどの教団・宗派も「俗・世間・世俗・在家」と完全に縁切りして存在・存続しているものはない。超俗者・在家者の世俗者・在家者の援助なしには存在しえないからである。

この構造がある限り、宗教者はどこかで「民俗」と何程かまたは十分に手を結ばなければならぬ。「再民俗化」の営みである。もしも人びとの「民俗的」願いにたいして「脱民俗」の教義(法義)を一方的に強いたらどうなるか。本願寺派門主の言葉を借りると、それは「正しいけれども意味がない」ことであり、「相手の関心に即した」営みではないことになる。

それでは相手の願い(ニーズ)をそのとおりとばかり「民俗」を全面的に受容し、その願いを満足させることだけに努めたらどうか。完全「民俗化」の実現である。

そうなれば教団・宗派の全面崩壊をもたらすであろう。



千葉県柏市 龍泉院東堂  
椎名宏雄

『参同契・宝鏡三昧』に学ぶ

4

質的に教団を支えてきた宗教伝統(民俗宗教)を貶めてきた状況に我慢がならないのである。氏はかく述べている。「親鸞や道元の知恵を、とくに哲学や思想として持ち上げる言説なら、もちろん今も掃いて捨てる程ある。だがそれらは大抵、ここに言う宗教伝統なり先人の知恵なりを、むしろ貶めるために書かれている。というか、そういう伝統や知恵の破壊者として親鸞や道元を持ち上げるのが、近代文化人のほとんど習性だと言つてよい。

この形で開祖が持ち上げられるほど、その後の教団ないし宗派は、ひたすらその開祖の心を裏切つてこそ発展してきたのだという、おきまりのストーリーに行き着いてしまふ(前掲書)。

「教団の発展は開祖の心を裏切る形で実現した」という意味の発言は、僧侶の間で自己反省の弁としてよく交わされている。

これは僧侶の自覚としては尊重されるべきことであろう。とは言え、ここでの「裏切る形」がもしも葬儀や祈禱を意味するとすれば問題なしとは言えない。

なぜなら、今日の教団であれ、今日も人びとの多くが僧侶に求められているのは主にこの二つの営為であるからだ。

死者を葬り弔う葬儀は教義(法義)から見れば明らかに「民俗」であるが、単なる民俗ではなく、仏教的・宗派的に意味づけされた「仏教民

俗」である。祈禱も同様である。繰り返しになるが普遍宗教は「脱民俗化」に始まり「再民俗化」することにより発展するのである。大村氏の表現を借りれば、それは「民俗のこころの包摂」ということにならう。大事なものは「教義」(教義)と「現場」(民俗)の「あいだ」である。

「あいだ」のダイナミズム

本稿の冒頭で「浄土や悟りに関心のない人に教義(法義)を説いても伝わらない」という真宗本願寺派門主の言葉を記した。

この言葉は多分寺を運営する僧侶のすべてにあてはまるものである。

脱民俗の教義・思想を、それに関心のない人たちにいかにして伝えるか。すべての普遍宗教の普遍的なテーマである。

これまでは葬儀と先祖供養が日本人の主な宗教的関心であり民俗的慣行であったから、僧侶は当該慣行に教義を乗せて実践すれば寺の運営はできた。このあり方をエリートたちは批判し貶めたが、所詮犬の速吠えに終わった。「民俗のこころ」が強かったからである。

ところがここに来て葬儀・供養を支えてきた民俗的慣行が崩落しつつあることが、研究者により指摘されている。葬儀・供養の小規模化、簡略化の流れが地方でも見られる

つてよいからである。今ひとつ、道元禪師は五位思想に対して大きな批判をくわえているからである。これが明瞭なのは、すでに先学者たちが指摘されているところである。禪師は、洞山さまに五位説があるという理解は、たいへん胡散臭い説であつて、けつしてとりあげるべきでないといふべかられるのだ。私は旧著の『洞山』において、主資料を『景德伝燈録』や編集のおそい洞山の語録などではなく、純禪の記録とされる『祖堂集』としたのは、こういう理解にもとづいての措置だったのであります。ですが、それなのにいつた宗門の祖師たちは、前述の三者をはじめとして、曹洞宗の宗旨は五位思想にあると理解し、その淵源をなぜ洞山さまに求めるのであろうか。これはたいへんむづかしい問題である、禅宗史上のさまざまな動向と関連し、いまにわかに論述することなど到底不可能である。ただひとつ簡略に言えば、洞山の法嗣である曹山の門下が唐末ごろはかなり発展し、そのグループには明瞭に五位の思想を内包していた。こんなグループはやがて衰退し、今度は洞山―雲居の系統にとつて代る。だが、すでに「曹山派」の意識は存続していたから、いわゆる「曹洞宗」となつても、五位のカラーは残つた。

専門家でない限りは、およそこんな理解でよいだろう。ともあれ、宋代になると曹洞



宗の特色は五位思想だと、自他ともに理解されるようになっていたことはまちがいない。こんな禅宗史、ないしは禅宗思想史上の大きな問題のほかに、いまひとつのむづかしい事項は、洞山も曹山も後人が所依とすべき語録じたいの性質が、実に複雑きわまりないという問題である。両者の語録といえ、現存するものは大正蔵経と大日本統蔵経に収められているものだけでも、原本の編集や刊行の相違によつて数種類も存在しているからである。

かつて、こんな複雑な語録類の文献整理を試みられたのが、往年の宇井伯寿博士であった。博士の『第三禅宗史研究』に収録される「洞山語録」と曹山語録の大論文によれば、洞山語録は四本、曹山語録は七本を数えるという。博士はこれら諸本を、一点一点ごとに細かな機縁の要素ごとに対照して、その新旧や系統を細密に調査検討された労作を公表されている。

だが、どんな碩学の労作も完璧ということはない。私はこの宇井博士の業務にも鈴木大拙博士の『六祖壇経』研究にも、それぞれ少暇や僅誤のあることを見出している。そこで右の宇井氏のご労作に対しては、筆者も些かながら禅文献史を志す者として、中年のころにおこがましくも宇井説を徹底して洗い直すことを企図し、手初めに洞山・曹山両者の文献資料を可能なだけ蒐集し始めたのであるが、他の業務や寺の諸事務などに忙殺されて、遂に完成できなかった。老耄の今となつてはこの計画倒れは最も心残りの一つであり、若き学者の方が是非とも挑戦していただきたいと望むばかりである。必ずや大きな功績と成果になることを信じて疑わないからである。

思わず『参・宝』から遠くへ飛んでしまった。高祖さまの五位批判はそれとして、本邦では中国における伝統を重んじて、五位研究が継続し、今はいつしか曹洞宗学の中心の課題にまでなつてきていることを認識しておきたい。であるからこそ、宗門の祖師たちもこぞつて五位を重んじ、また参究してきたのである。そこで次には前掲三者に引続き、五位や『参・宝』参究に画期的な成果を残している指月慧印を紹介したいと思う。

五 『参・宝』の研究文献について  
指月慧印

これまでは、近世江戸時代に花盛りとなつた曹洞宗学を担つた学僧たちが、『参・宝』に対してどういう見解を示していたかについて、代表的な碩学僧たちの言動についてご紹介してきた。といつても、それは洞山道白をはじめ、天桂伝尊・面山瑞方という三者についてだけであつた。それぞれ深い学殖と卓抜した宗乘眼をそなえた錚々たる大御所ばかりであるから、その炯眼はさすがであり、筆者も大いに勉強させていただいた。

ところで、三者三様のすばらしい宗学宗風は当然としてどの祖師にもおしなべて等しい見解は何かといえ、『参・宝』が曹洞宗の宗旨ともいうべき「五位思想」の源泉であるから殊更に尊いのだという価値観がうかがわれたことである。

私は前にも述べたように、『参・宝』と五位を結びつけるのは好きでない、というよりか、むしろ抵抗感を抱いていたのである。それはなぜかといえ、唐代禅語録の集成ともいうべき『祖堂集』(九五二―一五巻)の中には、曹洞宗はおろか、青原系統の祖師たちに五位の思想がほとんどみられないのである。五位に関係する語句があつても、いわゆる定形的な五位の語句は、まだ出てこない。少なくとも、石頭希遷・洞山良价の両祖師には五位思想はみられないとい

「教学」と「現場」という問題

日本の仏教の教団・宗派史を見ると、概して教祖・開祖の教義は「脱民俗」を強調し、「民俗」を卑下し、超俗を強調する孤高性を特色としているのにたいして、教団・宗派が拡大、発展するに従い、「脱民俗」が「再民俗」化するにいたることは、すでに触れている。

しかしこれはどこまでも概観であつて、教団・宗派の拡大、発展の過程の細部を十分に検討した上で体系的な帰結とは言えない。

それはこれからの仕事であると言えよう。

この問題は今日寺院「現場」に生きる僧侶各位にとつてはとりわけ深刻であるように思う。

なぜなら、現場でいろいろな人と接する僧侶は脱民俗を志向する「教学」と「民俗宗教」を生活慣行とする人びととの「あいだ」で活動せざるを得ないからである。

とくに現代では基本的な教義(法義)の研究・研鑽のことを「教学」と呼ぶようになっていいるが、この「教学」という語には近代アカデミズムの影響が色濃く投影されており、それが「あいだ」を上下つつまり「脱民俗」と「民俗」に引き裂く役割を果たしていると思われる。

近代アカデミズムの特色は科学性、客観性、体系性、実証性などにあり、宗教にたい

してもこれらの諸性格を踏まえた方法や解釈が適用されてきた。そこでは「本来」の「純粹」な宗教形態が追究され、きわめて観念的、高踏的な「教学」こそ理想とされる傾向が作りだされた。

「教学」の「学」は伝統的な教義(法義)の解釈と伝承に近代的な視点と方法・解釈を付加したというメリットがある反面、「脱民俗」と「民俗」の「あいだ」にあつて両者のバランスを執りつつ存続してきた「現場」の、とくに学僧各位の「自信」を弱める結果ももたらした事実も否定できない。

どの伝統教団の現場においても無視できないこの「あいだ」の問題を先鋭的に論じたのが真宗本願寺派の僧侶にして宗教・社会学者として知られる大村英昭氏である。

氏は現代の真宗教団の現場が「民俗」や「呪術」を含む宗教活動を行っているのに、僧侶ごとに「教学」に携わるエリート僧ほど現場の実情を軽視、無視してきた実情を赤裸々に指摘し、現に求められているのは各地の「民俗のこころ」を排除するのではなく、包摂していく仕方であり、この仕方こそが最も普遍的な教団のあり方だと指摘している(『現代社会と宗教』宗教意識の変容―岩波書店、一九九六)。

「現場からの宗教学」を標榜する氏はもちろん篤い真宗信仰の持ち主であるが、真宗教団の現場をめぐるさまざまな言説が専ら開祖・宗祖を持ち上げることに終始し、他面実

質的に教団を支えてきた宗教伝統(民俗宗教)を貶めてきた状況に我慢がならないのである。氏はかく述べている。「親鸞や道元の知恵を、とくに哲学や思想として持ち上げる言説なら、もちろん今も掃いて捨てる程ある。だがそれらは大抵、ここに言う宗教伝統なり先人の知恵なりを、むしろ貶めるために書かれている。というか、そういう伝統や知恵の破壊者として親鸞や道元を持ち上げるのが、近代文化人のほとんど習性だと言つてよい。

この形で開祖が持ち上げられるほど、その後の教団ないし宗派は、ひたすらその開祖の心を裏切つてこそ発展してきたのだという、おきまりのストーリーに行き着いてしまふ(前掲書)。

「教団の発展は開祖の心を裏切る形で実現した」という意味の発言は、僧侶の間で自己反省の弁としてよく交わされている。

これは僧侶の自覚としては尊重されるべきことであろう。とは言え、ここでの「裏切る形」がもしも葬儀や祈禱を意味するとすれば問題なしとは言えない。

なぜなら、今日の教団であれ、今日も人びとの多くが僧侶に求められているのは主にこの二つの営為であるからだ。

死者を葬り弔う葬儀は教義(法義)から見れば明らかに「民俗」であるが、単なる民俗ではなく、仏教的・宗派的に意味づけされた「仏教民

俗」である。祈禱も同様である。繰り返しになるが普遍宗教は「脱民俗化」に始まり「再民俗化」することにより発展するのである。大村氏の表現を借りれば、それは「民俗のこころの包摂」ということにならう。大事なものは「教義」(教義)と「現場」(民俗)の「あいだ」である。

「あいだ」のダイナミズム

本稿の冒頭で「浄土や悟りに関心のない人に教義(法義)を説いても伝わらない」という真宗本願寺派門主の言葉を記した。

この言葉は多分寺を運営する僧侶のすべてにあてはまるものである。

脱民俗の教義・思想を、それに関心のない人たちにいかにして伝えるか。すべての普遍宗教の普遍的なテーマである。

これまでは葬儀と先祖供養が日本人の主な宗教的関心であり民俗的慣行であったから、僧侶は当該慣行に教義を乗せて実践すれば寺の運営はできた。このあり方をエリートたちは批判し貶めたが、所詮犬の速吠えに終わった。「民俗のこころ」が強かったからである。

ところがここに来て葬儀・供養を支えてきた民俗的慣行が崩落しつつあることが、研究者により指摘されている。葬儀・供養の小規模化、簡略化の流れが地方でも見られる

ようになった。この風潮がどんどん進むのか一過性のものかはまだわからない。

この現実を前にして種々の努力・工夫を重ねる僧侶が現われてきている。

その一事例として埼玉県東松山市は清涼山曹源寺の場合を取り上げよう。

住職の中村瑞峰師は語る。「深遠な法を説く前に、まず人びとが集う場を作ることが大事。また寺は葬儀、先祖供養の場だけではないことを知ってもらふことが不可欠である」と。

師の願いは「意味のある師の実現にある。」

曹源寺の定例行事(持)の中核は毎週日曜日に朝に行われる「坐禅会」である。一九九八年(平成十)までは十二月三十一日に「年越し坐禅」も行つていった。

みづからも書をよくする師は「写経会」と「書道・如水塾」を定期的に開催(指導:川口如水氏。加えて「絵画教室」(指導:亀山祐介氏)をもち、秋の彼岸会には「彼岸展」を開き、仏像、仏画、書、絵画等を展示する。春の「花まつり」には法要の後に落語、曲芸、手品、しし舞い等を楽しんでもらう。

ちなみに師は落語家の橘家富藏師匠と親しく、機会あるごとに出演してもらつていいる。また「法話の会」と「仏教講演会」を随時開催し、終了後懇親会を開いて親睦を深め合う。さらにかつては「クリスマス」を開き、牧師を招いて聖書の話をしてもら

令和4年4月刊行予定 仏教企画刊

# 宗教人類学の地平

佐々木宏幹 佐藤憲昭 高見寛孝

佐々木宏幹先生が「仏教企画通信」に執筆された玉稿より収録

佐々木宏幹先生はご健在ですが、今号をもちまして連載は終了になります。ご愛読に心より感謝申し上げます。なお次号より研究者諸氏によります新連載を開始します。どうぞご期待ください。

師の行動には「教義」と「民俗」の「あいだ」をいかに結ぶかという問題を考える上で大変参考になる宗教的ダイナミズムが示されているように思う。そこには「坐る」、「拜む」、「観る」、「聴く」、「味わう」がすべて含まれている。

つたこともある。破天荒など思う人もあろうが、世は東西交流の時代であり、師の勇気を評価したい。「団体参拜」の数もすこぶる多い。

師は県内各宗派との連携にも同僚と共に力を尽くし合同の仏教行事の開催にも漕ぎつけている。

師の行動には「教義」と「民俗」の「あいだ」をいかに結ぶかという問題を考える上で大変参考になる宗教的ダイナミズムが示されているように思う。そこには「坐る」、「拜む」、「観る」、「聴く」、「味わう」がすべて含まれている。



# 東日本大震災から十一年 津波に流され還ってきた 梵鐘に鎮魂の想いをこめて

取材：矢田海里

宮城県名取市閑上東禅寺  
三宅俊乗さん

その鐘について、三宅俊乗（よしかず）ご住職は、二つのことをおっしゃった。「多少傷はありますが、音に聞しては震災前と変わらないうえです」「鐘の音というのは、撞く人の心持ちで一声一声ちがうのです」

大震災当日、俊乗さんは県外に出ていたため、揺れを感じることもなかった。仙台空港が津波にのまれる映像を見て驚き、戻ろうと考えたが、地震直後の混乱でそれも難しくなった。翌日、何とか東京まで戻ることができた。国道四号

月目の月命日となる日だった。地震発生時刻の十四時四十六分、復興公営住宅に囲まれた境内の一角で、それまで行われていた墓石の工事が音で止んだ。空は青く澄んで空気が冷たい。冬の太陽は傾きが早く、すでに西日になりつつある。

この日、鐘を撞くことになっていたのは、三宅ご住職の息子でもある、副住職の俊高さんだった。副住職は腕時計を確認すると、簡易やぐらに吊り下がった大きな青銅製の梵鐘の前に立った。鐘の前に立つと、自然と海の方向を向くようになっていく。十年と九か月前、沖の方から巨大な津波がやってきた海、そして人々の魂が還っていった海だ。副住職は撞木の手綱を両手で握り、勢いをつけて引くと、そのまま鐘の方へと押し出した。ゴォォンと重厚な響きが周囲の空気を震わせる。最初の鋭い音がすぐさま減衰し、やがて低いうなりのような音だけが辺りを包む。その柔らかな余韻が消え入るころ合意を見計らって、副住職はもう一度静かに手綱を引いた。

東禅寺に着くと、お堂の中にもたくさん瓦礫が折り重なっていた。「もしかしているのかなと思って探したのですが、それでもいなくなっていましたね。」

しかし、いなかったのではなかった。あまりの瓦礫の多さに、そのときは見つけることができなかったのだ。それから数日が経った三月十六日に父であり当時ご住職だった俊昭さんが、十八日には母親が、自衛隊によって発見された。「収容にあたった記録を見ますと、父も母も東禅寺の敷地

同じ頃、街の人も瓦礫の中から思い出す品々を拾い集め始めていた。全国からボランティアも集まり、活動が広がりを見た。瓦礫に「我歴」と当て字をした被災者がいたように、それらの活動は亡き人、なき故郷への弔いでもあったのだろう。写真や衣服などど並んでとりわけ大切に扱われたものに、位牌があった。家々の仏壇から流出したであろう数々の位牌は丁寧に洗われ、乾かされ、閑上小学校の

あとも昔と変わらない音色を響かせながら、それでいてどれ一つ同じ音ではないという、よくよく考えてみれば不思議な話でもある。

その鐘の音は、今も海辺の町に鳴り響いている。宮城県名取市閑上の東禅寺。年の瀬も近い十二月十一日、東日本大震災の犠牲者の十年と九か

項、語録類の発見、彫大な著述類の正邪や解説など、正に他の追従を許さないものがある。私は先生にこれらの大きな成果を纏めて専著とすることを懇願してはいたが、実現をみていない。因みに、本記事中に挿入した「布袋画指月贊」一冊は、むかし私が偶々入手した珍品であり、先生が専著を公刊する時にご利用を贈呈したが、まだご利用いただけ

線を北上し、閑上に戻ることでできたのは地震から二日が過ぎた十三日のことだった。「ですから津波を経験してはいないのです。もちろん、映像では見えますが実際の様子は全く見ていません」

閑上の街に入ろうとしたが道路は瓦礫でふさがっており、車は街の入り口から二キロ西側までしか入れない。しかたなく歩いて行った。うず高い瓦礫を超えて歩く中、ご両親のことを案じていた。

元亀四年（一五七三年）、東禅寺は次城の常秀寺からやってきた休山全應住職によって建立された。その頃は数十世帯の集落に小さな庵を建てたくらいのものだったのでないかと、三宅ご住職は語る。亡くなった俊昭さんは、初代から数えて二十三代目にあたるご住職だった。二十代で教師となり、それから五年ほどしてご住職となった。教育と仏道の二足の草鞋を、長らく続けてきた。宮城刑務所の教誨師となり、受刑者たちに教えるを説いてきた一方、名取市の教育委員長、曹洞宗の宮城県選出の宗議会議員や宮城県宗務所長などを務めた。そんな俊昭さんだったが、長男の俊乗さんに仏の道を強要するようにならなかつた。「いつか自分で気づくだろうと思っていたのかもしれないね」のちに俊乗さんは駒澤大学で仏教を学び、永平寺での四年間の修行を経て自らその道へと入っていく。それから三十年近くが経ち、先代の俊昭さんが高齢になったために、そろそろ住職を交代しようという話が持ち上がった。そしてその矢先、大震災が起きた。「人間というのは強くできて

き直るといふか。これ以上はもう、上にあがっていただけですから。絶望感というのはなかつたです。私の場合は寺の再建のこともあった。「自分一人のお寺じゃありませんから。檀家さんが大勢いらっしゃいます。そのために何とか復興しなくちゃ。東禅寺を絶えさせることはできないなと。四百五十年近い歴史の重みが双肩にのしかかった。」「再建しないで逃げていったのでは、人として和尚として亡くなった先住や歴代の和尚様方に申し訳ないというのがありました。」

再建へと気持ちを後押しした出来事もいくつかあった。まず、津波で傷んでしまったものの、幸うじて本堂は残った。加えて何日か通ううちに、瓦礫の中からご本尊と過去帳の一部が相次いで見つかった。「これらの三つが残ったことは、私にとっては奇跡のことなことでした。これはお寺を再建しろということなのだろうと、納得しました」

まず、指月の略伝を紹介したいのだが、これが難物。なぜかといえば、指月にはままたった伝記資料が存在しないからである。個人的な伝記記事も、他と一緒の叢伝的なものも、ともにないのである。著名人でありながら、伝記資料がないのはなぜか。それは、門人たちが編集しなかつたからといえは、それまで。指月自身も、そういった記事を遺さなかつたからである。

文字通り時宜にかなつた待望の刊行物であった。本書の編纂については、不肖ながらその編纂委員を務めた筆者の跋文に詳しいので再説はしないが、近世一六〇年間に於ける宗侶八百数十名におよぶ伝記資料の総集である。

ところで、いくら巨冊であっても、伝記記事のない祖師は収録のしようがない。そこで、著名人で原記事のない祖師、たとえば玄透即中や指月慧印などについては、年記のある関係史料から抜粋して抄録するという便法を採ったのである。いま、当面の指月に

二五種中、当面の「参・宝」や五位に関する著述は、「曹洞宗全書」の「注解三・五」に集められている。中心は「参・宝不能語」二巻であるが、全体的傾向は前述の「洞上古軌」には批判的であり、

天桂存の所説には同調的な傾向が推測される。たとえ「参同契不能語」の自序をみると、従来の注解は多いが誤りも多い、そこで正しい祖意を発揚宣布する責務から本書を著すのだ、と意気込みを述べる。なるほど末尾の注では、諸方で門庭施設（方便）を立てたり徒に教外別伝をいうのは誤謬弊害であると厳しく、列祖の生死弁道は驀直の行動進退にあり、鳥道のごとく歩め、と示している。いうまでもなく、これは而今の行事を重視する道元禪師の学道観をふまえたものである。

また、宗門では常に問題とされる「宝鏡三昧」の「重離六爻」：変尽為五の箇所に注して、この一文は莽鹵であり、仏祖の正法眼蔵は不昧であるの

の、洞門下ではどうして異を作し姦を企てるのか、寒暑は寒暑のままなのに、なぜ怪しい雷雨をもたらすのかと鋭く非難し、右の箇所を五位と関連させること自体を誤りだとする説示は特に注目され、他の宗学者たちにはほとんどみられぬ見解といえる。いうまでもなく、寒暑云々は洞山の「無寒暑」の説示を下敷きにしたものであり、洞山を高祖と慕う道元禪師の純一無雜で常に行道を重視する姿勢を、指月は己れの仏法の根底に据えよとの説示布敷である

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「洞上古軌」には批判的であり、

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。

「全書」に収められたのかなどは一目瞭然。とまれ、指月がいかに偉大な学匠であったかが分かる。



布袋画 指月慧印贊  
(北茨城市 東漸寺蔵・筆者撮影)

## 唐代の禅僧7

# 洞山

### 臨済と並ぶ唐末の禅匠

椎名宏雄 著  
臨川書店刊

定価: 3,150円 [本体3,000円+税]

最寄りの書店にて直接おもとめください

体育館の片隅に静かに並べられていった。いくつかの位牌の戒名は、亡くなった俊昭さんがつけたものだったと考えられる。

檀家さんの葬儀も困難を極めた。「通常、亡くなってから三〜四日経って葬儀を行いますけど、当時は火葬さえもできなかったですから。」街の火葬場も津波で破壊されていた。そのため都内にまで運ばれたご遺体がいくつもあった。

「ある程度火葬が終わったのはゴールデンウィークごろでした。」  
それから三宅ご住職は檀家さんの葬儀を始められた。東禅寺の檀家の犠牲者が二百三十五人。三宅ご住職は一年近くかけてそれに近い数の葬儀を行った。多い時は一日三件ということもあった。

墓石はおよそ四百基が根こそぎ流失した。過去帳の一部も流出したため、戒名がわからず、俗名を刻みなおすよりほかない人もいた。あるいは遺骨が流出してしまい、納骨堂の底に溜まっていた砂を掘り起こして、それを遺骨の代わりにせねばならない人も半数にのぼった。「ただの砂じゃないですから。何十年もあいた、ご先祖様の遺骨がしみ込んだ砂ですから。供養の証になるのではないかと思いついていただきました。」  
一家で亡くなったのが一人だけとは限らない。「五人亡くなってお宅もありました。あと四人というお宅も何件もありましたね。平均すると二

人くらいになるんでしょうね。みなさん心を込めて送っていただけね。」檀家全体のうち、およそ三分の一の世帯で犠牲者が出た。そして一家が全員亡くなった絶家が十件あった。

一方、ご遺体が見つからず、葬儀があげられないという人もいた。「まだ二件かな。十年経ちますけど、なかなか気持ちも整理できないのでしょね。」時間が経ち、逆に難しくなってしまうのでは、とご住職は考える。「あるお宅は、お母さんだけ見つからないんでしょね。おじいちゃん、おばあちゃん、お父さん、弟さんは見つかったんですけれど。」

諦めきれないのだろうと察しつつも、あまり「お葬儀しなさい」というのも押しつけがましく思え、今は静観している。「十三回忌までには何とかしなくちゃいけないと思っているのですが。」

三宅ご住職には、被災した檀家さんと接するときに意識してきたことがある。「過去には戻れないわけですから、未来に向けて気持ちを変えて進んでいきましょうと。でもどうしてもそこから抜け出せないという方もいます。そんなときは下手な助言はしなくて、黙ってその方のお話を聞くようにしています。時間とともに気持ちもだんだんと落ち着いてきますから。悲しみの極みに落ち込んでいた人も少しずつ明るくなってきていますからね。」

だが、時の流れでも解決しないことはある。「逆もあるんです。当初は気丈にふるまっていたけれども、時間の経過とともに落ち込んで、最終的には命を絶ったという方もいます。家族が亡くなられて

だんだんとその絶望が強くなっていったんでしょね。」  
他にも仮設暮らしのストレス、生活再建の見通しの立たなさなどが背景にあったのではと三宅ご住職は考えているが、定かではない。「わからないうちに、その人その人の心の内というのは。そうなる前に何かアプローチできなかったかな、という無念はありますね。」

月命日の鐘の音は朗々と響き続けていた。十八回撞くことになっていく。ここ最近は何もお参りに来る人も少なく、コロナもあってすっかり人が減った。今では住職と息子の副住職、そして妻の三人だけの法要となった。三宅ご住職はそれが少し残念でもある。しかし、たとえ家族三人だけであっても、法要は執り行われる。

副住職が撞木を引いては、前へと押し出し、ゴォーンと音が鳴る。梵鐘の背後に近所の公園の滑り台が見える。小さな子供たちが、かわるがわる滑り降りて遊んでいる。土手沿いを、厚着をした人々がマスクをして歩いている。その向こうで車が行き交っているのが、閑上大橋だ。あの日、

川向こうの仙台市では防災無線が鳴った。しかし、手前の名取市では防災無線が鳴らなかった。鳴っていれば、どれだけの命が助かっただろう。街が新しくなっても、取り返しのつかなきが消えるわけではない。  
被災してかろうじて助かった命、震災後に生まれた新しい命、すでに失われた命。この街に引越してきた命や、通りすがりの命もある。あらゆる命の交わり合った風景の中で、鐘は鳴り続ける。  
倒れた墓石に埋もれて発見された鐘。街や人が飲み込まれるさまを「見ていた」鐘。その鐘を撞くことに意味があると、ご住職は考えている。津波に耐えた証や、凄まじさを物語る傷、昔の町の記憶があるだろう。それを希望の鐘だとする見方も世間にはある。しかし三宅ご住職は言う。「この鐘は追悼の鐘だと思いません。震災で亡くなった方を追悼する鐘の音だと思っています。」  
やがて十八回の鐘撞が終わると、本堂の中で読経が始まった。副住職が朗々とした声で修証義を誦経し始める。三宅ご住職のやや甲高い声でそこに重なる。それが凛とした空気の振動となって、本堂に満ちる。「お布施を頂かないお経をこそ、しっかりと読みなさい」亡くなった俊昭さんの教えだったという。檀家さんのご先祖供養、子孫繁栄と安寧、すべてがそこに込められているのだから、と。

読経は続く。雲間から陽光が顔を出した。本堂の扉の隙間から強い西日が差し込む。堂内の床や三宅ご住職の背中に照らす。うす茶色の袈裟に施された刺繍がきらきらと光る。  
本堂のどっしりとした樫の柱には、見上げるような高さに黒ずんだ大きなひつかけ傷がいくつもあつた。震災遺構に乏しい閑上。後世にその面影を伝えるため、三宅ご住職はご両親を奪っていった津波の痕跡を、再建後もあえて残したという。傷ついた柱にしか支えられないものが、東禅寺にはある。

「閑上にはいつ戻れるのですか？」  
被災した人々がまだ避難所の段ボールの間で支援物資を頼りに暮らしていた頃から、復興へ向けた会合で、そんな声があがっていた。街が壊れても、人々は土地とその記憶を愛していた。松林から覗く青い海。ハマボウフウが這うように咲く砂浜。週末の朝市の呼び声や短い夏に打ちあがる花火を、愛していた。一つしかない小学校をみながら卒業して、一つしかない中学校にあり、同じ校歌を歌う。冬の朝には(赤貝の)漁師たちが白い息を吐きながら船を出す。お盆になれば家々の玄関に迎え火が灯る。  
「こういつた田舎ですから、故郷への思いは強いでしょうね。家が密集してごみごみし

ていましたけど。小さな路地がたくさんあつてね。」  
そんな港町の真ん中で朝六時、「時の鐘」はずつと鳴り続けてきた。  
最近になって、新しくなった閑上の町に人々が戻ってきた。「多くの人が犠牲になった場所でも、戻れるなら戻りたい。」ご先祖さんが眠る場所だから、そう簡単に移ることはできない。ご住職はそんな思いを人々の間に感じるといふ。だが、ことは簡単ではない。「閑上に行きたくないという方もいます。津波を思い出さずよう足を運ばない」と。実際、戻ってきたのは震災前の三分の一の世帯数に過ぎない。他はよそに移っている。「でも不思議なことに、皆さん移動してもこの近辺に住んでるんですよ。」美田園、杜せきのした、袋原。どこも車で十分くらいの場所だ。故郷の記憶と津波の記憶が交じり合い、そのような距離感を生み出した。  
「我々はお寺ですから。閑上の街全体が慰霊の場と考えています。よそに行つたのでは、供養の気持ちが薄れてしまいます。」つらい記憶の中心で、かけがえのない故郷のまん中で、鐘と読経は響いていく。「命が助かっていますので。東日本大震災の慰霊をしていくことが、生涯をかけての使命なのです。」

勤めなのでしょいか。科学的に証明されないものは信じてはいけないものと考えが浸透し、目に見えぬ死後の世界など多くの人の心の中で否定される傾向があるが故に声を大にして、又自分の言葉として自信を持つて発言をできないうちの中になつてしまつたのではないでしょいか。  
しかし、お釈迦様は「無記」とおっしゃったが否定はされていません。何故なら弟子の目連尊者の母親が地獄で苦しんでいるのを供養することから施食会の行事が始まつたと聞いている。あの世の世界の存在があることになる。お釈迦様は「無記」とされ「今より良く生きることの大切さ」を示されたのではなかつたのでしょうか。  
「修証義」のお経も道元禪師様の「正法眼蔵」からの教えで、一〜三章までは因果の道理や懺悔滅罪など人の心の琴線にふれる素晴らしい、深く胸に刻まれるお経だと思えます。  
「般若心経」の「色即是空」も今日に見えている物は縁の繋がりであり、実体は何もないと。又「空即是色」は何もないと思つても縁の繋がりが見えていないだけだよ、と。私がいまある存在は過去多くのご先祖の繋がりでの今の自分があり、一人でも欠けていれれば自分の存在はない。そのように考えれば仏教行事の一つも心に響き腹に落ちてくるし、仏教離れを防ぐ手立てになるかもしれない。年回法要の際、「修証義経本」を皆で読

むことで人間誰しも心に残り人には言えぬ傷もあるからきつと救いとなるであらましよう。  
今の若者は「パワースポット」なる所に行く人が多いです。それは目に見えぬ何かに興味があり、信じたい、救いを求める気持ちの現われでありましよう。人が心の癒しを求めている今こそ、仏教の教えが不可欠ではないだろうか。昔も今も、人々は苦しみ悩み多い人生を歩いています。知識人は別として、心の拠所として一般庶民は、仏様・観音様・お地藏様の御加護を求めますがろうとする気持ちがあります。  
それを無視することは仏教の本当の姿ではないでしょう。仏教離れを防ぐには  
①御仏の御加護を頂く(人の真心が仏様との感応道交の近道と思われ)  
②寺院の行なつている仏教行事を一般の人々に分かりやすく話す  
ことだと思えます。  
目に見えない世界を否定する科学だが、実際に電波は見えないが存在しています(テレビ・電話等)。  
私の地域では年回法要の時、晒をお供えする風習があります。それは故人があちらでも修行をされ「衣が汚れるであらうからと衣替えをし、又修行を続けてもらいたい」との意味で、今も晒をお供えして下さる檀家の方もあります。昔は、寺には「地獄絵図」のような物があつて、子ども頃そのような話を見聞きする

と恐ろしかったものです。善い事、悪い事、人の生き方の道標として子ども心に残つたものです。  
「善因良果」「悪因苦果」の仏教の基本的な教えです。今の子ども達にもそんな機会があるならば殺人やいじめやなど一歩踏み止まることもできたでしょう。  
これは私の父の話ですが、父が病で倒れた時「観音様を上から下りて来られ、まだ早い、来てはいけない」と言われ目が覚めたとのこと、信じがたい話ですが父は信心の篤い人でした。  
目に見える世界が凡てではないんだよ。  
見えない世界だつてあるんだよ。  
大切なもの程見えないんだよ。  
人の心もそうだし、御先祖様だつて見えないんだよ。  
「とらわれず  
こたわらず  
きめつけず  
自由自在な心」  
大分県 宗玄寺 寺族  
松樹英子  
令和三年十一月十三日 合掌

だ、時の流れでも解決しないことはある。「逆もあるんです。当初は気丈にふるまっていたけれども、時間の経過とともに落ち込んで、最終的には命を絶ったという方もいます。家族が亡くなられてだんだんとその絶望が強くなっていったんでしょね。」  
他にも仮設暮らしのストレス、生活再建の見通しの立たなさなどが背景にあったのではと三宅ご住職は考えているが、定かではない。「わからないうちに、その人その人の心の内というのは。そうなる前に何かアプローチできなかったかな、という無念はありますね。」  
月命日の鐘の音は朗々と響き続けていた。十八回撞くことになっていく。ここ最近は何もお参りに来る人も少なく、コロナもあってすっかり人が減った。今では住職と息子の副住職、そして妻の三人だけの法要となった。三宅ご住職はそれが少し残念でもある。しかし、たとえ家族三人だけであっても、法要は執り行われる。  
副住職が撞木を引いては、前へと押し出し、ゴォーンと音が鳴る。梵鐘の背後に近所の公園の滑り台が見える。小さな子供たちが、かわるがわる滑り降りて遊んでいる。土手沿いを、厚着をした人々がマスクをして歩いている。その向こうで車が行き交っているのが、閑上大橋だ。あの日、

再び外へ出る。三宅ご住職が線香を持ち、いくつかの場所を回る。歴代ご住職の墓石、三宅家の墓石、無縁仏となつた人々の墓石。そして震災供養のための白い大きな妙光慈海観音像。「慈海」の字にはつとさせられる。多くの人が還つていった海を供養し、いつまでも静かな海であることを願う名前。海を憎むのではなく、その海でさえも慈しみを持つて供養していく、観音様の慈悲の心なのだ、ご住職は語った。

それまで参拝者のなかつた境内の墓所に、いつの間にかちらほらと人の姿が見え始めていた。月命日の、災害発生時刻を忘れていない、忘れることのできない人たちが。若い子供を持つ家族の間には、朗らかな笑みもこぼれている。その笑みはあの日から長い時間が経つたことを示している。だが同じ津波にのまれながら、その悲しみはどれ一つ同じでないのだから。  
帰り際、追悼の鐘を撞かせてもらうことができた。海の方を向いて合掌一礼、撞木の手綱を握り、そつと前へ押し出す。コォーンという軽やかな響きがひとつ、海の方へと消えていった。

やだ かいり  
1980年千葉県生まれ。  
東日本大震災直後に現地入りし、現地に住みながら被災した人々の声を拾う活動続ける。ユネスコなどと共同し、全国で震災写真展を16回開催。著書に『港匠』(柏書房刊)ほか。



前号の佐々木宏幹先生の記事をご覧頂きました読者様より編集部あてにお手紙を頂戴しましたのでご紹介させていただきます。

「仏教企画通信」を毎回楽しく拝読させて頂いています。今回66号は今までは内容を異にし、現在、急速に変化(衰退)しつつある仏教文化を以前発刊の22号、23号の記事から取り上げて下さったもので、興味深く読ませて頂きました。輿論よく読ませて頂いた「通信」を紐解くと22号は、今から十年ほど前の平成二十二年の新聞でした。その当時大都市では「直葬」「無宗教葬」「樹木葬」などの言葉がみられるとあります。

この傾向は、十年後の今の時代も都会から田舎へと素早く広まったようにあります。最近のコロナの感染拡大によりますます顕著になっていきます。

今ではコロナ感染者の死者との面会もままならず、火葬にも立ち会えず、遺骨のみという仏教の存在すら無に感じている異常事態が続いている。コロナ以前から葬儀に関し

ては、一般の人々の考えは昔とは違い、家族葬がほとんどとなり、近隣の人々も亡くなったことを後から知ることが多くなりました。  
その一つは、親が子どもに迷惑をかけたくないから、というところもあるようです。親戚の人さえ、お詣りできない、生活を共にする家族だけの葬儀です。又長い間、亡き親との交流があつた人たちがお別れさえもできない状態が日本中に蔓延しています。コロナで人との交流が遮断されている上にますます分断が加速されているのが現実です。コロナ禍の二年弱の間、大きく世の中が変わり、それが定着している。今後の葬儀もこれが主流となるでしょう。

扱って、そうなるも仏教の存在、寺の存在、僧侶の存在はどうなるのでしょいか。  
江戸時代からの檀家制度は田舎はまだしも都会では少なくなつていましてはないでしょいか。又23号では「あの世はあると自信を持つて言えますか?」を読んで、多分自信のない僧侶の方が多いのではないでしょいか。何故?

お釈迦様は「無記」とおっしゃり、あの世の存在を肯定も否定もされませんでした。現行行われている仏教行事は、葬儀・中陰・年回法要・施食会等々、すべて死者ありきとしての行事です。対象はあの世の人々です。  
これらの行事を行う時、僧侶は心を何処に置いているのでしょいか。単なる儀式として言葉をかえれば「生業」のお

「とらわれず  
こたわらず  
きめつけず  
自由自在な心」  
大分県 宗玄寺 寺族  
松樹英子  
令和三年十一月十三日 合掌

「とらわれず  
こたわらず  
きめつけず  
自由自在な心」  
大分県 宗玄寺 寺族  
松樹英子  
令和三年十一月十三日 合掌

「とらわれず  
こたわらず  
きめつけず  
自由自在な心」  
大分県 宗玄寺 寺族  
松樹英子  
令和三年十一月十三日 合掌

「とらわれず  
こたわらず  
きめつけず  
自由自在な心」  
大分県 宗玄寺 寺族  
松樹英子  
令和三年十一月十三日 合掌

編集後記

二月三日の節分に相模原市のあおいそら保育園で赤鬼役をした。誰が鬼役かを知られないように保育園に入り、金棒を振り上げながら入場すると三歳児さんがキヤーキヤー言いながら逃げ回る。この純粋さに心を奪われ保育園を後にした。

コロナ禍いかがお過ごしでしょうか。小生は二月一日に第三回目の接種予約が取れているのでオミクロン株が大流行の今、少し安心ではあるが、コロナ禍への対応はワクワクしないというのが世論だ。お寺(仏教界)側から言えれば少し寂しい。生き方の危機の今仏教の教えが役立つのではないのだから残念でならない。



藤木隆宣

全日本仏教会は何のためにある組織なのか。このように時こそ大いに組織の力を見せるべきと考える。例えば三仏忌には既成仏教界を代表して何かを発信したらどうだろうか。発信すべきと考える。

一月二十九日に百カ日のお宅があった。お参りはお二人(母親と息子さん)だ。法要は本尊上供、ご回向、修證義第四章と五章、妙法蓮華経如来壽量品偈、舍利礼文、ご回向の法要だった。

法要が終わった後奥様がお茶を飲みながらご主人はすい臓がんであったとのこと、有名な病院に通っていたのでご主人は治ると信じていたとのこと。医師から余命が伝えられて亡くなるまでの速さにつくりしておられた。猫を飼っておられたようでご主人をなくした猫ちゃんも寂しそうですとお話しされた。それと、

法要後の修証義のお話に対して「聞いているだけで頭がいっぱいになってしまいました」との感想を漏らされた。私は「朝起きて歯磨きをするくらいでいい感じでお読みになる習慣ができればいいですね」とお話しした。

最近「生死は仏の御いのちなり」を法話でお伝えすることが多い。私が本当に仏の御いのちとして生きているか問われている。まだまだであると自覚して日々を過ごす自分がいる。

佐々木宏幹先生は現在ご健在です。『仏教企画通信』の巻頭言を一七一年間に亘り御執筆下さいましたがこの号が最終稿になりました。読者の皆様と共に先生に感謝を申し上げます。先生のお蔭でこの新聞を欠かすことなく発刊出来ました。先生は駒澤大学のほかに客員教授として東大をはじめとして五一の大学、大学院で教えておられたそうです。このことは先生の学識の深さが広く認められていたことを証明しています。

合掌

2022夏・お盆号特集予告

2022年5月30日 発刊予定

曹洞禅グラフ

161号

太瑞知見師

長崎県玉峰寺住職

インタビュー

- ・お釈迦様も食べたお粥のお話し
- ・夏を乗り切るためのお釈迦様のお薬とは
- ・暑い夏には、「ご先祖さまに手を合わせ、身体も心もとのえて、すっきり快適に暮らしましょう!」

たいずいちけん 薬剤師。たまみね保育園園長。九州大学大学院(薬学)、駒澤大学大学院(仏教学)修了。学生や外国人にも坐禅指導や法話を行う他、科学と仏教の見解を交えた新しい切り口で論文やエッセイを発表。

インタビュー | 加藤順子

仏教企画通信

ご支援寺院名

R3.10.3~R4.1.20

所在地	寺院名(個人名)	金額
愛媛県	高昌寺	30,000
合計		30,000

手まり学園

寄附者御芳名

R3.10.3~R4.1.20

所在地	寺院名(個人名)	金額
東京都	石井友子	5,000
北海道	竹田晴美	10,000
神奈川県	青木義次(98)	5,000
東京都	石井友子	5,000
千葉県	三浦良治	10,000
神奈川県	青木義次(99)	5,000
山口県	清木隆法	10,000
東京都	石井友子	5,000
神奈川県	青木義次(100)	5,000
神奈川県	斉藤光枝	10,000
埼玉県	吉祥院	20,000
東京都	石井友子	5,000
合計		95,000

てまり学園にご支援をいただき誠にありがとうございます。

仏教企画発行の刊行物 (\*部数により割引があります) すべて税別価格です

- 『修証義』解説 丸山劫外著 1,400円\*
- 『うたい継ごうよ、子守唄』 長田暁二・西館好子共著 1,200円\*
- 『まんが問答一期一話』 文平和宏昭 まんが垣内敬遠 1,200円\*
- 『葬送のしおり』 長井龍道著 30円
- 修証義読本『生老病死』 須田道輝著 500円\*
- 『曹洞宗檀信徒經典』 須田道輝解説 300円\*
- 曹洞宗檀信徒必読『供養のすべて』 靈元丈法著 140円\*
- 曹洞宗檀信徒必読『葬儀のすべて』 靈元丈法著 150円\*
- 随想集 玉崎千鶴子 その永遠の世界を探って 500円
- 『観音の咒 大悲心陀羅尼』 渡辺章悟著 500円

\*『仏教企画通信』を10部以上購読希望の方は一部100円で頒布致します。同封はがきの空欄にその旨をお書きください。(消費税、送料別)

曹洞禅グラフ

発行日	
春彼岸号	2月10日
夏お盆号	5月30日
秋彼岸号	8月20日
冬正月号	10月30日
1部 200円	
9部以下	200円
10部以上	150円に割引
20部以上	135円に割引
50部以上	130円に割引
100部以上	120円に割引
200部以上	110円に割引
300部以上	100円に割引
500部以上	90円に割引

観音の咒 大悲心陀羅尼

渡辺章悟

発行所：仏教企画 定価：本体 500円+税

観音の咒 大悲心陀羅尼 渡辺章悟著

お求めは下記お申込先までご連絡ください

お申込み

〒252-0116 神奈川県相模原市緑区城山4-2-5 ※住所・FAX番号がわかりました TEL: 042-703-8641 FAX: 042-782-5117 Email: fujiki@water.ocn.ne.jp

仏教企画

※ご寺院名後の番号(3桁もしくは4桁)がお客番号(コード)になります。お申込みは ①ご寺院名 ②お客番号 ③電話番号でも可能です。